九州産業大学国際文化学部紀要　第58号　77－89（2014）

ギリシア北部レフカディアにおけるマケドニア墓の形態とその特徴

松　尾　登史子・安　永　信　二

Ⅰ　序

ギリシア北部マケドニア（Makedonia）の中央部分をなす緑豊かなイマシア（Imathia）は古代マケドニア王国の揺籃の地であり、かつて数々の都市・集落が栄えた（図１）。なかでも現在のコパノス（Kopanos）村、レフカディア（Lefkadia）村及びナウッサ（Naousa）町を結んだ三角域に点在する遺跡群は古文献に見えるマケドニア都市ミエザ（Mieza）と同定され、都市建築遺構が次々に出土し在りし日の姿が次第に明らかになりつつある（図２）。広大な地域に跨る遺跡の中で、とりわけその北端に連なる、レフカディア近郊の「マケドニア墓（Makedonikoi taphoi）」[1]

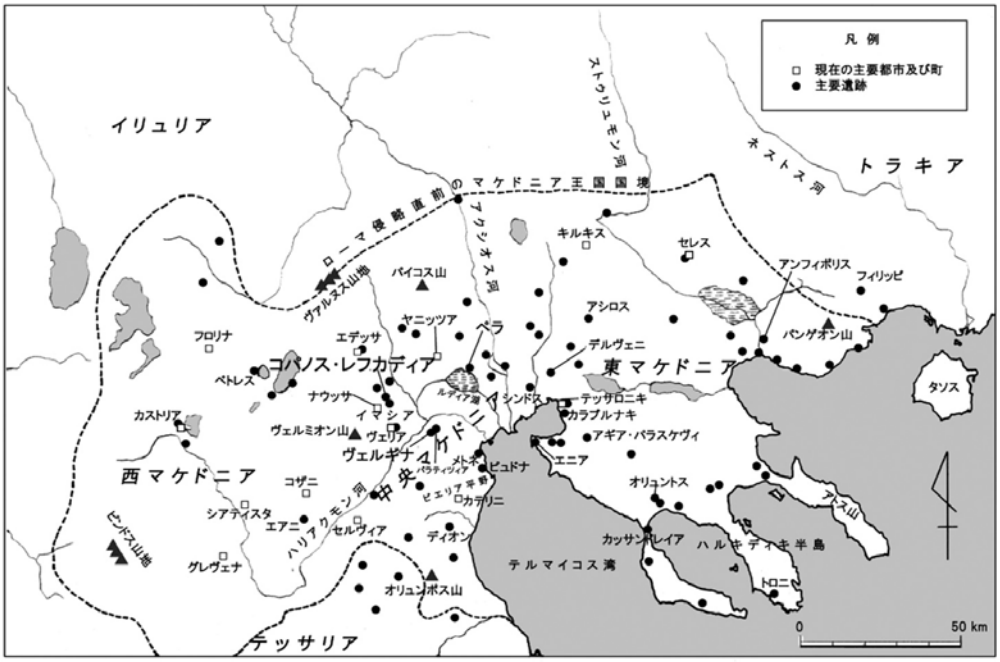
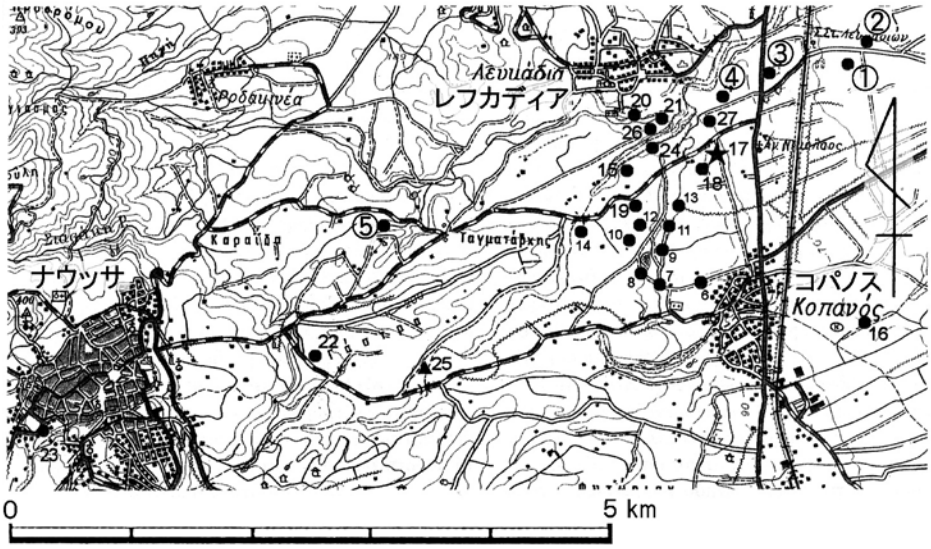


図１　ギリシア領マケドニアにおける都市・集落遺跡（先史～ビザンツ期）の分布図



コパノス・レフカディアの遺跡群（①～⑤はマケドニア墓）

①「審判」の墓、2004年の墓（表１番号３，５）
②「花」の墓（表１番号４）
③「キンチ」の墓（表１番号１）
④「リュソンとカリクレス」の墓（表１番号２）
⑤ ハルリス氏所有農地の墓（表１番号６，７）
６.～14. ヘレニズム期の墓群
15. アルカイック期～ヘレニズム期の墓群
16. 古典期・ヘレニズム期の墓群
17. 古都市中心部の建築遺構群（ベロヴィナ）
18. ローマ期劇場跡
19. ヘレニズム後期建築遺構
20. 周壁遺構
21.~23. ローマ期建築遺構
24. 建築遺構
25. アリストテレス学校祉
26. 古キリスト期建築遺構
27. 青銅器時代集落跡

図２　コパノス・レフカディアの遺跡：都市とネクロポリス

群は、その規模、及び、埋葬主体部の特徴的な内装等により重要視されてきた。これらの墓の一部はヴェルギナ（Vergina）の王墓にも劣らぬ規模と洗練された文化的様相から古代マケドニア社会上層に属する被葬者が想定され、古都市ミエザの特別な位置づけを語るものとなっている。

本稿では、これらのレフカディアのマケドニア墓埋葬主体部の形態を分析してヴェルギナのマケドニア墓と比較することにより構造上の特徴を見出したい。

Ⅱ　主題の背景

本論の主題の背景として、マケドニア墓の一般的特徴や墓形態をめぐる諸問題につき概略し、分析対象地であるコパノス・レフカディアの都市遺跡とネクロポリスの現状をマケドニア墓に焦点を当てつつ述べ、問題設定に至った経緯を述べる。

(1) ギリシアにおけるマケドニア墓とその分布

埋葬主体部とそれを覆う墳丘よりなる墓形態は東地中海全域に分布しているが[2]、そのうち次の特徴を持つものがマケドニア墓と呼ばれる。つまり、蒲鉾形屋根(vault)[3]を頂く埋葬主体部と墓道、そしてこれらを覆う墳丘よりなり、単室あるいは複室構造を持つ埋葬主体部はギリシア神殿風の正面形態を擁し、主室にしばしば寝台を設えているものである[4]（図３）。古代マケドニア王国の絶頂期から衰退期（前４世紀第３四半期から前２世紀半ば）までマケドニア地方を中心に盛行したとみられるが故に本呼称をもつ。

マケドニア本土以外では、エペイロス（Epeiros）やテッサリア（Thessalia）、トラキア（Thrake）など、王国の勢力が及んだギリシア北部地域に分布する一方、小

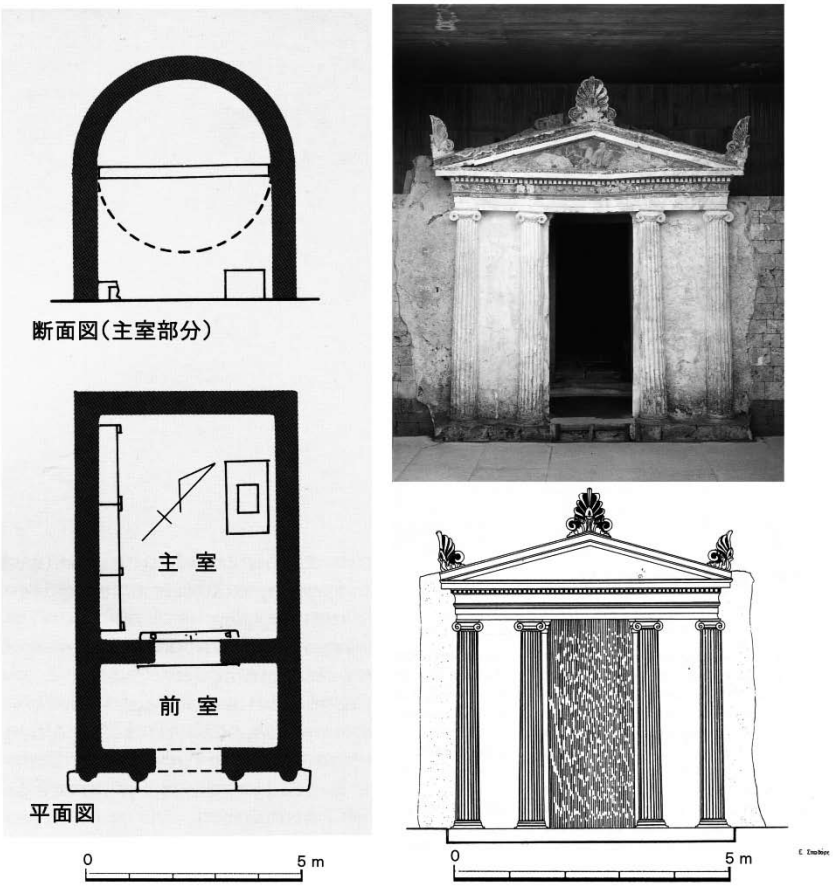


図３　レフカディアのマケドニア墓（「花の墓」表１番号４）の平面図（左下）と断面図（左上）、正面写真（右上）、正面図（右下）

アジアや南ギリシアにも点在する[5]。1993年の時点で総計80基余りが確認されており[6]、うち、マケドニア本土における出土数は60基以上にのぼる。現在も各地で発掘調査が続いているため、数は年々増加している。

これらのマケドニア墓の調査は19世紀に英仏軍人による踏査という形で始まった。20世紀に入って戦塵の中にも徐々にその出土数を増し、内戦後、ギリシア人による調査も軌道に乗り、その調査・研究が大きな画期を迎えたのは、1976～1980年に行われたヴェルギナにおける大墳丘（Megali Toumba）の発掘調査によってであった。これを機にマケドニア墓への関心は飛躍的に高まり、マケドニア地方各地の古代墓の調査は増加の一途を辿った。これらのマケドニア墓について現在に至るまでに幾つかの集成が行われ[7]、これらの集成作業を軸に同墓とその関連分野につき様々に議論されてきた。その主なテーマは、墓自体に関わる直接的なものとして、1）編年[8]、2）起源[9]、3）関連墓（他の地域との関連）[10]、が挙げられ、これらから派生する間接的なものとして、4）都市や被葬者の同定[11]、が挙げられる。

(2)　コパノス・レフカディアの都市遺跡とネクロポリス

ミエザの都市遺跡は、現在のコパノス村、その北西に位置するレフカディア村、両村の西に位置するナウッサ町を結ぶ広範囲の領域に点在している（図２）[12]。遺跡の時期はヘレニズム期～ローマ期が主であるが、青銅器時代から古キリスト期まで一貫して居住の痕跡が確認されている[13]。西側にヴェルミオン（Vermion）山地を臨むナウッサ台地から東に緩やかに下ったコパノス・レフカディア間の低地に、古典期及びヘレニズム期、ローマ期の重要な建築遺構が集中している。なかでもコパノス村ベロヴィナ（Belovina）の複合建築遺構は古都市のアゴラの一部をなしていたとみられ、その南西には劇場跡も出土している[14]。また古都市郊外とみられるナウッサのイスヴォリア（Isvoria）には名高いアリストテレス学校（Scholi Aristotelous）址も出土している[15]。このように遺跡・遺構が広範囲に分散しており、レフカディア村南のツィフリキ（Tsiphliki）に出土した強固な周壁の周辺がアクロポリスとみられている他は、都市域を示す明瞭な痕跡は確認されていない[16]。

一方、ネクロポリスの分布は上述の都市建築遺構のそれと一見混在しているかに見えるが、都市域の把握を念頭に分布状況を見極めれば、以下の３墓域に分けることが可能である（図２）[17]。

α）レフカディア南東墓域（番号①～④，15）：マケドニア墓群（６基）、古典期墓群（ナウッサ町カマラ（Kamara）のミツィアニ（Mitsiani）氏所有農地）

β）コパノス北西墓域（番号６～14）：ヘレニズム期墓群（コパノス村ルディナ

（Roudina））

γ）コパノス東墓域（番号16）：古典期・ヘレニズム期墓群（コパノス村カプスゥラ（Kapsoura）カヴァラリ（Kavallari）氏所有農地）

⑶　問題の所在

本稿で対象とするのは、前項で示したα）レフカディア南東墓域のマケドニア墓群６基、及びどの墓群にも含まれないマケドニア墓２基である（表１）[18]。これらのマケドニア墓８基について各々発掘調査が行われており、一部の墓埋葬主体部について特に正面形態にあらわれた壁画や内装の文化度の高さが注目されてきた。一方、埋葬主体部形態についてもその多彩さが目を引くが、これについては殆ど注目されて来ていない。少数であるがヴェルギナ・ネクロポリスには見られない構造もあり、ヴェルギナとの比較をすることでその形態的特徴を見出し得ると考えられ、これを本稿の目的とする。

Ⅲ　主題

本稿の目的を達するための分析の手順は以下の通りとする。分析対象であるレフカディアのマケドニア墓８基、及び、ヴェルギナの13基につき（表１）[19]、α）両群の時期的関係をみる。更に、β）両群を埋葬主体部の構造にて分類し系統図を作成し、両群の形態上の相互関係をみる。

α）レフカディアとヴェルギナのマケドニア墓の時期分布と相関

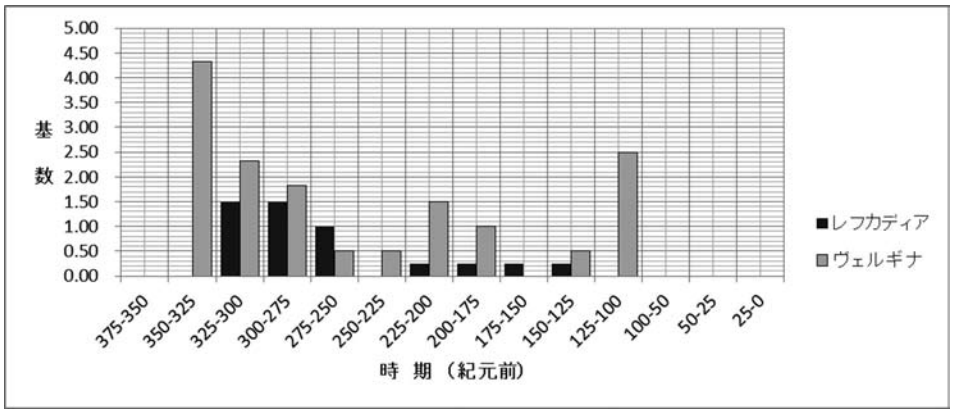
各々の時期分布をみた[20]。１世紀を四半期に分け、按分した[21]。

その結果はグラフ１の通りである。ヴェルギナでは前４世紀第３四半期に突如として現れその後は数を減らしながらも前３世紀第４四半期に小ピークを迎え、前２世紀半ばに消滅したかに見える一方、前２世紀第４四半期には数を増すが、その後完全に消滅する。レフカディアは前４世紀第４四半期に現われ前３世紀第２四半期まで一定数をやや減らしつつも保つが、前３世紀第３四半期には消滅する。その後前３世紀第４四半期～前２世紀第３四半期は僅かな数存在する。両者を比較すると、レフカディアの墓はヴェルギナの後に続くように出現するがその数は少なく、前３世紀半ばに一旦消滅し、前３世紀末～前２世紀半ばすぎには僅かな数を保つが、ヴェルギナの墓が迎えた最後のピークに重なることなく完全に途絶える。

表１　レフカディアとヴェルギナのマケドニア墓基礎データ表

番号	ＩＤ	埋葬主体部名称	構造	埋葬主体部法量										屋根			報告書記載造営時期（紀元前）	番号
				外法			内法											
				幅(m)	奥行(m)	規模(㎡)	主室幅(m)	主室奥行(m)	主室面積(㎡)	前室幅(m)	前室奥行(m)	前室面積(㎡)	総面積(㎡)	主室	前室	正面		
1	KL-paLttKinch	「キンチ」の墓；レフカディアⅡ	複	4.53	7.17	30.48	3.55	4.08	14.48	3.55	1.50	5.33	19.81	V	H	H	3世紀前半	1
2	KL-paLttLK	「リュソンとカリクレス」の墓；レフカディアⅢ	複	4.17	6.17	23.35	3.05	3.92	11.96	0.91	0.82	0.75	12.70	V	H	G	3世紀末～2世紀半ば	2
3	KL-paLttJ	「審判」の墓；レフカディアⅠ	複	8.67	8.83	67.50	4.90	4.82	23.62	6.50	2.12	13.78	37.40	V	V	G	325～300年	3
4	KL-paLttA	「花」の墓；レフカディアⅦ	複	5.07	8.59	43.53	4.07	5.10	20.76	4.08	2.00	8.16	28.92	V	V	G	3世紀前半	4
5	KL-paLtt2004	2004年発見の墓	複	4.10	6.50	26.65	3.10	3.80	11.78	3.10	1.00	3.10	14.88	V	V	G(?)	4世紀末～3世紀初頭	5
6	KL-paLttChI	ハルリス氏所有農地の墓Ⅰ；レフカディアⅤ-Ⅰ	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	6
7	KL-paLttChII	ハルリス氏所有農地の墓Ⅱ；レフカディアⅤ-Ⅱ	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	7
8	KL-paLttTh	セオドリディス氏所有農地の墓；レフカディアⅥ	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	8
9	A-MTtMTt2	大墳丘の墓Ⅱ（「フィリポスⅡ世」）；ヴェルギナⅢ	複	5.56	9.50	52.82	4.46	4.46	19.89	4.46	3.36	14.99	34.88	V	V	H	4世紀第3四半期	9
10	A-MTtMTt3	大墳丘の墓Ⅲ（「王子」）；ヴェルギナⅣ	複	5.08	6.35	32.26	4.03	3.00	12.09	4.03	1.75	7.05	19.14	V	V	H	310年? 325年	10
11	A-MTtMTt4	大墳丘の墓Ⅳ（自由形柱）	複	5.00	5.50	27.50	3.50	4.00	14.00	＊	＊	＊	＊	V	H	＊	3世紀前半	11
12	A-aMTtBt	ブルカス氏所有農地の墓；ヴェルギナⅡ	単	3.99	3.99	15.92	2.99	3.04	9.09	－	－	－	9.09	V	－	H(?)	2世紀末	12
13	A-aMTtDymart	ヴェルギナ村役場（旧文化センター）の墓	複	5.00	10.00	50.00	3.85	4.30	16.56	3.85	3.55	13.67	30.23	＊	＊	＊	4世紀末	13
14	A-nAttRomaios	「ロメオス」の墓；ヴェルギナⅠ	複	6.62	9.38	47.31	4.56	4.56	20.79	4.56	2.50	11.40	32.19	V(?)	V	G	4世紀末～3世紀前半	14
15	A-nAttEfridike	「エウリデュケ」の墓	複	7.90	10.65	84.14	4.48	5.51	24.68	4.48	2.50	11.20	35.88	V	V	＊	344年	15
16	A-aPtHtH	「ユゼ」の墓	複	3.85	4.80	18.48	2.55	3.10	7.91	2.55	1.45	3.70	11.61	V	V	＊	333～300年	16
17	A-aPtHtHa	「ユゼ」α	単	3.15	4.00	12.60	2.00	3.00	6.00	－	－	－	6.00	H	－	－	アレクサンドロスⅢ世期	17
18	A-aPtaBtA	ベラスα（寝台付）；ヴェルギナⅤ	複	4.12	5.59	23.03	3.04	3.06	9.30	3.02	1.23	3.71	13.01	V	H	G	3世紀前半	18
19	A-aPtaBtB	ベラスβ（戦士の壁画）；ヴェルギナⅥ	単	3.82	5.00	19.10	3.00	3.50	10.50	－	－	－	10.50	V	－	H	3世紀初頭	19
20	A-aPtaBtC	ベラスγ；ヴェルギナⅦ	単	3.24	3.53	11.44	2.32	2.53	5.87	－	－	－	5.87	V	－	＊	3世紀末～2世紀初頭	20
21	A-aMTtsMTt	大墳丘南の墓	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	2世紀後半	21

【凡例】 複：複室、単：単室、Ｖ：蒲鉾形、Ｈ：平形、Ｇ：切妻形、－：該当せず、＊：不明



グラフ１　レフカディアとヴェルギナのマケドニア墓造営数の時期変遷

β）レフカディアとヴェルギナのマケドニア墓埋葬主体部分類・系統図の作成と両群の相関

レフカディアとヴェルギナのマケドニア墓埋葬主体部の墓プランと基礎データ（表１）における法量及び屋根のつくりから、墓の構造につき分類を行なった。まず、主室を基本にすると、主室と前室の屋根がともに蒲鉾形、かつ、両室の幅が同じであれば、ひとつの建築物を構成していた可能性が高い。一方、主室と前室の屋根が蒲鉾形であっても両室の幅が異なれば、それは各々別の建築構成部分であったとみなせる。また、主室屋根が蒲鉾形で前室が平形屋根であれば、両室の幅の如何にかかわらず各々別の建築構成部分であった可能性は高い。更に、正面には神殿風正面壁を付加していたとみられ（図３右）、その屋根の形状も平形と切妻形の２種類に大別できる。

上述の結果、埋葬主体部が建築主体部M（蒲鉾形屋根付）・増築部E（平屋根付）・正面部F（平屋根Fhあるいは切妻形屋根付Fg）で構成されていたと仮定できる（図４上の部分図）。主室とこれらの組み合わせを整理すると、最初の段階としての単室の建築主体部（M）から主室に仕切りで前室を設けた形（Ma）が派生し、一方で建築主体部に増築部にて前室を設けた形（ME）が現われる。次の段階として、各々、単室の建築主体部に正面部を付した形（MF）、複室の建築主体部に正面部を付した形（MaF）、及び、単室の建築主体部と増築部に正面部を付した形（MEF）に発展する系統図が描ける（図４、下の系統模式図）。これによれば、単室と複室は単に室数の増減によるものだけでなく、構造上の相違によるものが存在することが分かる。

この系統図において、ヴェルギナのマケドニア墓は、M、Ma、ME、MF、MaF、MEFの全ての形がみられる一方、レフカディアのマケドニア墓は、MaF、及び、MEFとその派生形のみがみられる[22]（図４、表２）。一方、正面部の屋根の形態に注

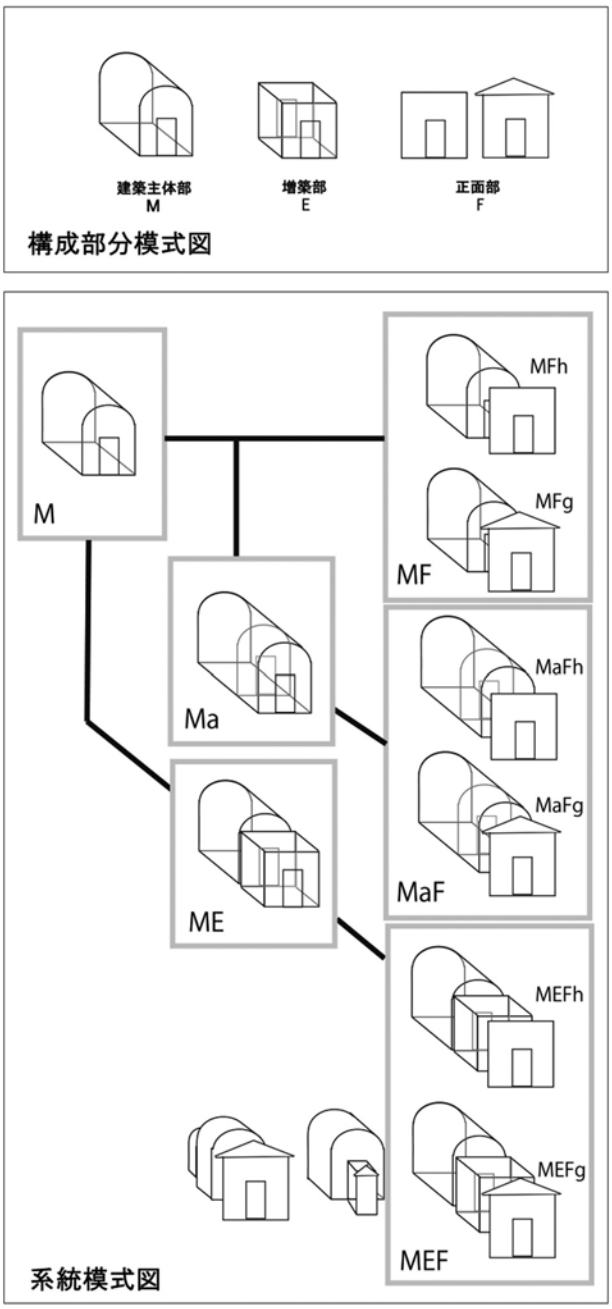


図４　マケドニア墓埋葬主体部の構成部分模式図（上）、及び、系統模式図（下）

目すると、MFにおいては、平形屋根付正面のMFhはヴェルギナのみで見られ、切妻形屋根付正面のMFgは分類上想定されるのみで、実際はヴェルギナとレフカディアのどちらにも存在しない。また、MEFにおいては、切妻形屋根付正面MEFgが両

表２　レフカディアとヴェルギナのマケドニア墓の構造による分類表

<table>
<tr><td rowspan="2">単室</td><td rowspan="2">M：20(V)</td><td rowspan="2">正面付単室</td><td rowspan="2">MF</td><td>MFh（平形屋根付正面）　：12(V), 19(V)</td></tr>
<tr><td>MFg（切妻形屋根付正面）：　－</td></tr>
<tr><td rowspan="4">複室</td><td rowspan="2">Ma：15(V), 16(V)</td><td rowspan="4">正面付複室</td><td rowspan="2">MaF</td><td>MaFh（平形屋根付正面）　：9(V), 10(V)</td></tr>
<tr><td>MaFg（切妻形屋根付正面）：4(L), 5(L), 14(V)</td></tr>
<tr><td rowspan="2">ME：11(V)</td><td rowspan="2">MEF</td><td>MEFh（平形屋根付正面）　：1(L)</td></tr>
<tr><td>MEFg（切妻形屋根付正面）：2(L), 3(L), 18(V)</td></tr>
</table>

注：Mは埋葬主体部の建築主体部、Ｅはその増築部、Ｆはその正面部、ｈは正面部の平形屋根、ｇは正面部の切妻形屋根、を各々示す（図４を参照）。また、番号はマケドニア墓の個体番号（表１の墓番号）、（　）内のＬはレフカディア、Ｖはヴェルギナを各々示す。

方でみられ、平形屋根付正面のMEFhはレフカディアでのみ見られる。ただし、このMEFgにおけるレフカディアの墓は、増築部Ｅが主室より幅が広く主室同様蒲鉾形屋根を持つもの（「審判の墓」、表１番号３）、及び、増築部Ｅが主室に比して矮小であるもの（「リュソンとカリクレスの墓」、表１番号２）、であり、MEFの典型的な形から外れた形態をしており、構造上ではMEFには含まれるが派生形として捉えるのが妥当と考えられる。更に、正面部付形態（MF、MaF、MEF）について、ヴェルギナは平形屋根付が４基、切妻形屋根付が２基である一方、レフカディアにおいては平形屋根付が１基、切妻形屋根付が４基である。

Ⅳ　まとめと今後の課題

上述の分析から、レフカディアのマケドニア墓埋葬主体部の形態的特徴をまとめれば次の通りとなる。

マケドニア墓埋葬主体部形態についての系統図から、ヴェルギナには全形態が存在する一方で、レフカディアには単室がなく全て複室構造で、更に、正面部が取り付けられた発展的形態及びそれらが派生した形が存在した。つまり、レフカディアには単純な形態は存在せず、ヴェルギナと比較して多彩な発展的形態のみが存在したこととなる。また、正面部について、ヴェルギナでは平形屋根付が優勢だが、レフカディアでは平形より切妻形屋根付の比率がかなり大きい。また造営時期について、レフカディアではヴェルギナと比較して時間軸上の分布幅が小さく、ヴェルギナに遅れて出現した後、王都の傍らで一定の墓を保持し続けた観がある。

鉄器時代から居住の痕跡をもち、古典期に既に一定の貴族的特色を持っていた地方都市ミエザがヘレニズム期からローマ期にかけて特に繁栄したことは数々の建築遺構の存在が示すところである[23]。近年の発掘成果では、マケドニア王国の激動の時期で

あった前４世紀末に都市中心部の大規模な公共施設をつくり上げた強力な政治権力の存在が示唆され、その豊富な出土遺物により東征以降の異文化流入の痕跡も多く確認されている[24]。これら全ては、マケドニア王国における古都市ミエザの重要な位置づけを示すものと考えられる。本稿の分析において看取されたレフカディアのマケドニア墓の前４世紀末～前３世紀前半の興隆について、またヴェルギナと比較して発展・派生形態を持つことについて、ヘレニズム期における都市の繁栄との関連が如何なるものであったのかが注目されるところである。生と死の都市双方の視点を以て、コパノス・レフカディア遺跡の今後の発掘調査の進展を注視していくことを今後の課題としたい。

凡例

名詞の表記につき、特に原語の転写と語句の説明等に関して、以下の留意点を示す。なお、ギリシア語に関しては、慣用化しているもの、及び、古代の人名は古典語読みで、研究上の用語や研究者名及び現代の地名などは現代語読みとした。

【固有名詞】慣用語はカタカナのみで記した。それ以外に関し、研究上の用語、人名、地名についてはカタカナに転記しその後の（　）内に原語をラテン・アルファベットで記した。ただし、注釈内で原語がギリシア語の場合にはギリシア語アルファベットを使用している。

【一般名詞】適宜邦訳し、場合によってはカタカナに転記し、（　）内あるいは注釈に原語と若干の説明を加えた。

Abbreviations

ΑΑΑ　Αρχαιολογικά Ανάλεκτα εξ Αθηνών

ΑΕΜΘ Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη

BSA Annual of the British School at Athens

図版典拠

図２　Αλλαμανή, Β., Α. Κουκουβού και Ε. Ψαρρά “Μίεζα, πόλη Ημαθίας” *ΑΕΜΘ*20 χρόνια, Επετειακός τόμος, 2009, 21, Σχ.1を一部改変して筆者作成。

図３（左平面・断面図）Ρωμιοπούλου, Κ. *Λευκάδια- Αρχαία Μίεζα* Αθήνα, Υπουργείο Πολιτισμού, Ταμείο Αρχαιολογικών Πόρων και Απολλοτριώσεων, 1997, 30, πίν. 24 を一部改変して筆者作成。

図３（右写真）　Ρωμιοπούλου 1997 *ibid* 31, πίν. 26.

図３（右正面図）Ρωμιοπούλου, K. “A New Monumental Chamber Tomb with Paintings of the Hellenistic Period near Lefkadia (West Macedonia)” *AAA* 6, 1973, 89, Fig.2を一部改変して筆者作成。

注

1 「マケドニア墓」は後述する特徴を持つ古代マケドニア独特の墓形態であるが、現地の研究者らが慣用的に使用してきた呼称であるため、ここでは「　」をつけて示した。以下では「　」は省略する。

2 Kurtz, D.K. and J. Boardman *Greek Burial Customs* London, Thames and Hudson, 1971, 273~282.

3 アーチを奥行き方向に連続させた構造体をアーチ形屋根とすれば、マケドニア墓の屋根はアーチよりも頂部弧高がやや低い傾向があり、ここでは特徴を想像しやすくするために、「蒲鉾形屋根」と呼ぶ。

4 D. パンデルマリス（Παντερμαλής）がマケドニア墓の定義を行なっている。Παντερμαλής, Δ. “Οι μακεδονικοί τάφοι της Πιερίας” *Οι αρχαιολόγοι μιλούν για την Πιερία*(28-29 Ιουνίου και 4-5 Αυγούστου 1984) Θεσσαλονίκη 1985, 9 ~13を参照。

5 Kurtz and Boardman 1971 (*supra* n.2) 273~283 ; Σισμανίδης, K. “Μακεδονικοί τάφοι στην πόλη της Θεσσαλονίκης” *Θεσσαλονίκη*1, 1985, 35~70 ; Μαστραπάς, A. N. *Ελληνική αρχιτεκτονική: από τους πρωϊμους ιστορικούς χρόνους μέχρι τη Ρωμαιοκρατία* Αθήνα, Ινστιτούτο του βιβλίου - Μ. Καρδαμίτσα, 1994, 138~140.

6 Miller, S. *The Tomb of Lyson and Kallikles: A Painted Macedonian Tombs* Mainz am Rhein, Philipp von Zabern, 1993, 104~116 (Appendix II).

7 Παντερμαλής, Δ. “ Ο νέος μακεδονικός τάφος της Βεργίνας” *Μακεδονικά* 12, 1972; Gossel, B. *Makedonische Kammergräber* Berlin, Monath’s KopieDruck, 1980; Miller 1993 *ibid.*

8 マケドニア墓の編年は、主に建築的観点から様々に試みられてきた。特にヴェルギナの王墓発見以前のものは殆どの副葬品が盗掘を受けており、研究者は建築物のみを対象とした編年を試みていたが完成に至らなかった（Andronikos, M. “Some Reflections on the Macedonian Tombs” *BSA* 82 1987, 1; Πέτσας, Φ. *Ο τάφος των Λευκαδιών* Εν Αθήναις, Αρχαιολογική Εταιρεία, 1966, 46; Παντερμαλής 1972 *ibid*, 176）。したがって、このような状況にあるマケドニア墓の年代は、副葬品として出土した個々の遺物により決定されてきた。指標となる遺物として頻繁に使用されているのは古銭や陶器であるが、正確な年代決定のためには様々な問題が存在する。

9 マケドニア墓の起源について、主に、その埋葬主体部の各建築要素に関わる問題と、埋葬主体部（墓葬形態）自体に関わる問題とに分けられる。前者に関しては、蒲鉾形屋根および正面形態の系譜が論じられ、これらの建築技術について外来説と自生説、折衷説に分かれて論戦が交わされてきた。後者、つまりマケドニア墓の墓葬形態自体の起源については前者ほど活発ではないが、「方形土壙墓（Λακκοειδείς τάφοι）」あるいは「箱形墓（Κιβωτιόσχημοι τάφοι）」から発展する経過が提示されて議論が展開されてきたが、結論は出ていない。これらの議論についての詳細は、松尾登史子「マケドニア墓埋葬主体部に関する考察 - 正面柱式の意味について - 」『西アジア考古学』第12号 2011年、43～45参照。

10 マケドニア墓の様々な要素において見られる他地域からの影響について、地理的に、南ギリシア的、バルカン的、小アジア的、の３つの影響が考えられてきた。歴史的観点から考えれば、南ギリシア、特にアッティカとの関連、またペルシア戦争時のペルシアからの影響と、ペルシアを通じて小アジアから受けたイオニア的影響が存在する。建築的には既述のように蒲鉾形屋根や神殿風正面形態の導入、風習的には墓室内の寝台上における仰臥状態の酒宴を模した埋葬、などについて、他地域からの影響が論

じられてきた。近隣地域の例としては、トラキアやイリュリア（Ιλλυρία）の墓との関連が色濃く見られ、密接な繋がりが見受けられる。*Cf.* Tomlison, R. A. “Ancient Macedonian Symposia” *Αρχαία Μακεδονία* V, 1970, 308~315.

11　ヴェルギナの王墓の発見に関連して、その被葬者についての議論、更にはヴェルギナが旧王都アイガイ(Αιγεαί)であったかどうかの議論も行われ、現在も論争が継続中である。前者については、松尾 2011 (*supra* n.9)、註13、後者については、松尾登史子「中央マケドニアの古代都市に関する考古学調査の現状」『西アジア考古学』第14号 2013年、註17を参照。

12　コパノス・レフカディア間は直線距離にして約2.5キロメートル、コパノス・ナウッサ間は約５キロメートルであり、600ヘクタールほどの面積に遺跡が集中している。

13　Ρωμιοπούλου, Κ. *Λευκάδια- Αρχαία Μίεζα* Αθήνα, Υπουργείο Πολιτισμού, Ταμείο Αρχαιολογικών Πόρων και Απολλοτριώσεων, 1997, 8; Αλλαμανή, Β., Α. Κουκουβού και Ε. Ψαρρά “Μίεζα, πόλη Ημαθίας” *ΑΕΜΘ* 20 χρόνια, Επετειακός τόμος, 2009, 22.

14　ベロヴィナ出土のΓ形建築遺構は、明らかになっている部分が少なくとも東西方向総長約300メートル×南北方向100メートルの規模をもち、アゴラなどの公共的機能を持つ複合施設と解釈されている。西半分は宗教的機能が確認されており、医神アスクレピオス（Ασκληπιός）信仰の存在が判明している一方、東半分は経済（交易）・社会・政治的機能を持っていたと報告されている。Ρωμιοπούλου 1997 *ibid*, ８~12 を参照。特に近年の調査成果については、Αλλαμανή et al. 2009 *ibid*, 22~28を参照。

15　この地に洞窟を利用したイオニア式柱廊が出土しており、Ph. ペッツァス（Πέτσας）により、アリストテレス学校址であるとされた。Ρωμιοπούλου 1997 (*supra* n.13) 12~15; Αλλαμανή et al. 2009 (*supra* n.13) 18~19.

16　レフカディア村の南側を流れるアラピッツア（Αράπιτσα）川に面した地点にアクロポリスが発見され、1993～95年に発掘調査が行われた。Αλλαμανή et al. 2009 (*supra* n.13), 22, n.20.

17　墓分布状況については、以下を参照。Αλλαμανή et al. 2009 (*supra* n.13), 21~22; Ρωμιοπούλου, Κ. και Γ. Τουράτσογλου, *Μίεζα: Νεκροταφείο υστεροαρχαϊκών – πρώιμων ελληνιστικών χρόνων* Αθήνα, Υπουργείο Πολιτισμού, Ταμείο Αρχαιολογικών Πόρων και Απολλοτριώσεων, 2002.　なお、「花」のマケドニア墓の東北東の地点（地図外）に位置するセオドリディス氏所有農地のマケドニア墓（Τάφος στο κτήμα Θεοδωρίδου、表１番号８）も、α）レフカディア南東墓域に含まれる。また、ハルリス氏所有農地のマケドニア墓２基（Τάφος στο κτήμα Χαρούλη Ι, ΙΙ、図２番号⑤; 表１番号６，７）は現在のところどの墓域にも含まれない。

18　表１掲載のレフカディアのマケドニア墓の主要参考文献は以下の通り。「キンチ」の墓（Τάφος Kinch、表１番号１）については、Ρωμιοπούλου, Κ. και Ι. Τουράτσογλου “Ο μακεδονικός τάφος της Νάουσας (τάφος του Kinch)” *Αρχαιολογική Εφημερίς* 1971, 146~164; Ρωμιοπούλου 1997 (*supra* n.13), 30~35を参照。Miller 1993 (*supra* n.6), 109~110 (n. 18A)に参考文献リスト掲載。「リュソンとカリクレス」の墓（Τάφος Λύσωνος και Καλλικλέους、番号２）については、Miller 1993 (*supra* n.6); Ρωμιοπούλου 1997 (*supra* n.13), 39~44を参照。「審判」の墓（Τάφος Κρίσεως、番号３）については、Πέτσας, Φ. *Τάφος των Λευκαδίων* Αθήνα, 1966, 173~178; Gossel 1980 (*supra* n.7) 167~168 (n.13); Ρωμιοπούλου 1997 (*supra* n.13), 24~29; Σιομανίδης, Κ. *Κλίνες και κλινοειδείς κατασκευές των μακεδονικών τάφων* Αθήνα, 1997, 149を参照。Miller 1993 (*supra* n.6), 110 (n. 18C)に参考文献リスト掲載。「花」の墓（Τάφος Ανθεμίων、番号４）については、Gossel 1980 (*supra* n.7) 196~199 (n.13~15); Ρωμιοπούλου, Κ. “A New Monumental Chamber Tomb with Paintings of the Hellenistic Period near Lefkaida (West Macedonia)” *AAA* 6, 1973, 87~92; Ρωμιοπούλου 1997 (*supra* n.13), 30~35; Σιομανίδης 1997 *ibid*, 151

を参照。Miller 1993 (*supra* n.6), 110~111 (n. 18F)に参考文献リスト掲載。2004年発見の墓（Τάφος του 2004）については、Λιλιμπάκη-Ακαμάτη, Μ. και Κ. Τροχίδης "Νέος μακεδονικός τάφος στα Λευκάδια Ημαθίας" *ΑΕΜΘ*18 2004 (2006), 465~484を参照。ハルリス氏所有農地の墓（番号６，７）については、Παντερμαλής, Δ. "Ο νεός μακεδονικός τάφος της Βεργίνας" *Μακεδονικά* 12, 1972, 178 (αριθ.6) 参照。Miller 1993 (*supra* n.6), 21, 110 (n. 18D) に参考文献リスト掲載。セオドリディス氏所有農地の墓（番号８）については、Παντερμαλής 1972 *ibid*, 178 (αριθ.7) 参照。 Miller 1993 (*supra* n.6) 21, 110 (n. 18E) に参考文献リスト掲載。一方、ヴェルギナのマケドニア墓の主要参考文献については、松尾 2011 (*supra* n.9)、表1-bを参照。なお、2014年３月にテッサロニキ（Θεσσαλονίκη）で行われたAEMΘ定例学会にて、ギリシア考古学局のA. コタリディ（Κοτταρίδη）により、ヴェルギナの新たな王族級墓５基の発見が報告された。うち２基がマケドニア墓であるが、これらは現在調査中であるため詳細なデータは未公開であり、本稿の分析対象とはしていない。ギリシアの新聞 *Πολιτισμός* (2013年３月14～16日付) 参照。

19 表では、埋葬主体部を基本にして、同じ墳丘下に収められた主体部同士、更に墓群、エリア毎にまとめて列挙している。データ不明分があるため、実質の分析対象は計17基となる。

20 各墓の時期については、発掘調査報告書から引用した。殆どが副葬品からの推定であると見受けられ、造営時期と使用期間の区別はないと考えられる。

21 各墓の時期を比率的に割り振って総計した。報告書記載の各墓の時期は、例えば、Ａ墓は「前４世紀後半」、あるいは、Ｂ墓は「前５世紀」、Ｃ墓は「前320年」等という表現である。本分析では、四半世紀を１単位として、各々、Ａ墓は、前350～325年が0.5、前325～300年が0.5、とカウント、Ｂ墓は、前500～475年、前475～450年、前450～425年、前425～400年が各々0.25、Ｃ墓は、前325～300年が１、とカウントし各時期単位を総計して、時期分布のヒストグラムを作成した。

22 基礎データ表（表１）の番号11（大墳丘の墓IV）はMEF、15（「エウリデュケ（Ευρυδίκη）」の墓）と16（「ユゼ（Heuzey）」の墓）はMaF、番号20（ベラス（Μπέλλας）γ）はMF、に各々属する可能性もある。また、６，７，８，13，21は不明であり、17は箱形墓との中間的形状をしている為に例外とする。

23 Αλλαμανή et al. 2009 (*supra* n.13), 17~30.

24 Αλλαμανή et al. 2009 (*supra* n.13) 28.　都市中心部の大規模建築遺構については、註14参照。